

入選

「医療スタッフの思い」

群馬県立桐生高等学校3年 船越 萌香

気付くと、私の体は前の座席に乗り出していた。運転していた母親に意識はない。

何が起こったのか訳が分からないまま救急車を呼ぼうと、私は慌てて自分の携帯電話を探していた。隣に置いてあった通学用カバンの中身は殆どが辺りへ放り出され、電話はすぐに見つかりそうになかった。すぐに車を降り、通りがかりのトラックにむかって

「救急車を呼んでくださいっ」

と、人生のうちでもう二度と出すことはないだろうという程の大声で叫んだ。車の外に出て初めて、自分の服が血まみれなのに気付いた。そして、顎にはこれまで経験したことの無い痛みが走った。

病院での検査の結果、嫌な予感は的中した。下顎骨を3ヶ所骨折。全治2ヶ月、いやそれ以上かかるとも言われた。診断を聞いた時はすぐにでも泣き叫びたい気持ちになった。クラリネットが吹けない。高校生活すべてをかけてやってきたと言っても過言ではない吹奏楽部の活動から、しばらくの間離れなければいけない現実をつきつけられた。そこには不安と絶望に押しつぶされそうになる私がいた。この時から私の入院生活はスタートした。

治療は想像以上に辛いものだった。骨折による痛みで夜も眠れず、痛み止めの点滴を打ってもらわなければ寝返りさえうてなかった。1週間も経つと上下の歯をワイヤーで縛りつけ、固定し、4週間もの間固形物が食べられず、食事はすべて流動食となった。そんな治療が私に乗り越えられるのか不安で仕方がなかった。私の胸の内を察してか、医療スタッフの方々は常に私の立場に立って看病してくれた。みるみる痩せていく私を心配した看護師は度々栄養士を病室に連れてきては、少しでも多く栄養の取れる食事は無いものかと親身になって考えてくれた。部活への復帰を心配していると、

「きっと大丈夫だから」

と、一緒に音楽の話をしてくれた。

病室の冷たい天井を眺めていると、彼らはいつでも笑顔で病室に入ってきてくれた。その度に私自身も笑顔になれた。人の存在がこんなにも温かいものだとは知らなかった。

病院で行う治療に、楽しいものは決してない。治療によって多くの患者が身体的、そして精神的なダメージを受けている。このことは医師や看護師をはじめとする医療スタッフがいくら配慮したところで避けられないのかもしれない。しかし私はその医療の現場で多くの人の「思い」を感じた気がする。早く元通りの生活をさせてあげたい。少しでも楽にしてあげたい。いつでも患者さんに前を向いてほしい。それぞれ異なった「思い」かもしれないが、その「思い」はすべて患者一人一人に対する思いやりの心だった。

医療の場は私達がよく行くデパートや遊園地とは違う。皆何らかの救いを求めてやって来る。しかしそこで提供する医療サービスがデパートや遊園地のように人々に喜びや幸せを与えることができたとしたら一もはやそれは、治療を超えた究極のサービスなのではないだろうか。

病院がただただ辛い治療の場ではなく、入院という特別な体験を通して自分の生きている意味や価値、そして喜びを感じられる場所であってほしい。そんなことを考えたとき、私は医療従事者になる強い強い決心をした。

人と関わることの大切さ、そして人を思う心の温かさを感じた、あの幸せな入院生活を支えてくれたすべての人に感謝の気持ちを込めて。私のできる、唯一の恩返しとして。